Japan Society of Obstetrics and Gynecology

461 乳癌術後のtamoxifen(TAM)内服が内性器に及ぼす影響について

兵庫県立西宮、済生会富田林*、
浜岡総合病院**
井谷嘉男、伊藤公彦、堀　謙輔、田守陳哉、
安達　進*、斉藤謙介*、野田恒夫**

［目的］TAMは乳癌術後の補助療法に使用されているが、抗エストロゲン剤のため内性器を標的臓器とする可能性がある。そこでTAMの内性器に及ぼす影響を臨床的、細胞学的、内分泌学的点から検討した。［方法］(1)乳癌術後TAM内服患者25例の内性器と関連する副作用を調査した。(2)TAM内服患者25例(月経周期12例:MC群、閉経期13例:MP群)のmaturation index(MI)と、基礎疾患を認めないTAM非内服症例68例(月経周期41例、閉経期27例)のMIを算定しTAM内服が膣上皮に及ぼす影響を比較検討した。(3)MC群3例、MP群7例の血中LH, FSH, E2, Pレベルを測定した。［成績］(1)TAM内服例中、8例が性器出血を、6例が月経不順を訴えた。他覚的には子宮または卵巣腫大を9例に認めた。(2)子宮内膜組織診では嚢胞性萎縮内膜を4例に、嚢胞性腺腫増殖症を1例に認め、また子宮内膜癌の発症を1例に認めた。(3)子宮内膜癌発症例は13年間TAMを内服した80歳の症例で子宮が腫大、MIは0/82/18と右方移動し、E2：15.6pg/ml、LH：7.9mIU/ml, FSH：18mIU/mlと月経周期に近いホルモンレベルを示した。(4)MC群の内服期間は1・48ヶ月、MP群の内服期間は1・96ヶ月であった。(5)TAM非内服閉経期のMIは6±9 / 87±16/ 7±15であったがMP群では0/72±19 /27±19と有意に右方移動していた($p<0.05$)。(6)MP群の1例で血中E2が89.4pg/mlと上昇していた。［結論］TAMは内性器にホルモン様作用を発現する可能性があること、必ずしもエストロゲンレベルを抑制しないことが示された。以上のことはTAMの内服が子宮体癌の危険因子となりうる可能性を示唆するものと考えられた。

462 腹腔鏡下手術における腹壁吊り上げ法の意義－気腹法との対比による腹壁吊り上げ法の臨床評価－

藤田保健衛生大，聖霊会聖霊病院*
白木　誠，廣田　穣，門脇　恵，青木豊和，
大橋由政，佐藤匡昭，服部公博，多田　伸，
河上征治，田中信之*

〔目的〕産婦人科領域では，腹腔鏡下手術における腹壁吊り上げ法の使用経験は浅く，その是非に関しては一定の見解のないのが現状である．そこで今回我々は，気腹法との対比より腹壁吊り上げ法（以下腹吊法）の臨床評価を行った．〔方法〕対象は，腹吊法を導入した1994年9月より1995年9月までの腹腔鏡実施症例127例：気腹法63例，腹吊法64例とし，①全身麻酔下の呼吸動態の差異と②手術操作性の良否を気腹法と腹吊法とで比較した．なお，当科では腹吊法はLaparolift ™ systemを採用している．〔成績〕気腹法と腹吊法での呼吸動態の差異を術前値を100とした%changeで評価すると，気腹法での肺コンプライアンスは気腹前値の50%前後に低下し，気道内圧は150%前後上昇すること，そして呼気終末CO2濃度は120%程度上昇することが確認された．しかし，腹吊法ではこれら3者のparameterに大きな変動は認めず，腹吊法は麻酔管理上の問題点が少ない方法であることが確認された．また，腹腔鏡下操作における利便性は，腹吊法では気密性維持の制約と煩雑さから開放されるため常に一定の視野で手術が行えること，さらにはsimpleなTrocar構造に起因する種々の操作性の向上（内視鏡下での縫合・結紮が容易，凝血の除去や腫瘍の摘出が容易，大量の吸引洗浄が可能，手術器具の選択の幅が増えるなど）が列記され，気腹法に比べ自由度の高い手術が可能であった．〔結論〕気腹一辺倒であった腹腔鏡下手術に腹壁吊り上げ法という選択枝が増えたことは，手術の安全な遂行と適応拡大を進める上で意義のあるものであり，今後，腹壁吊り上げ法の臨床応用の頻度は確実に増加するものと思われた．

NII-Electronic Library Service